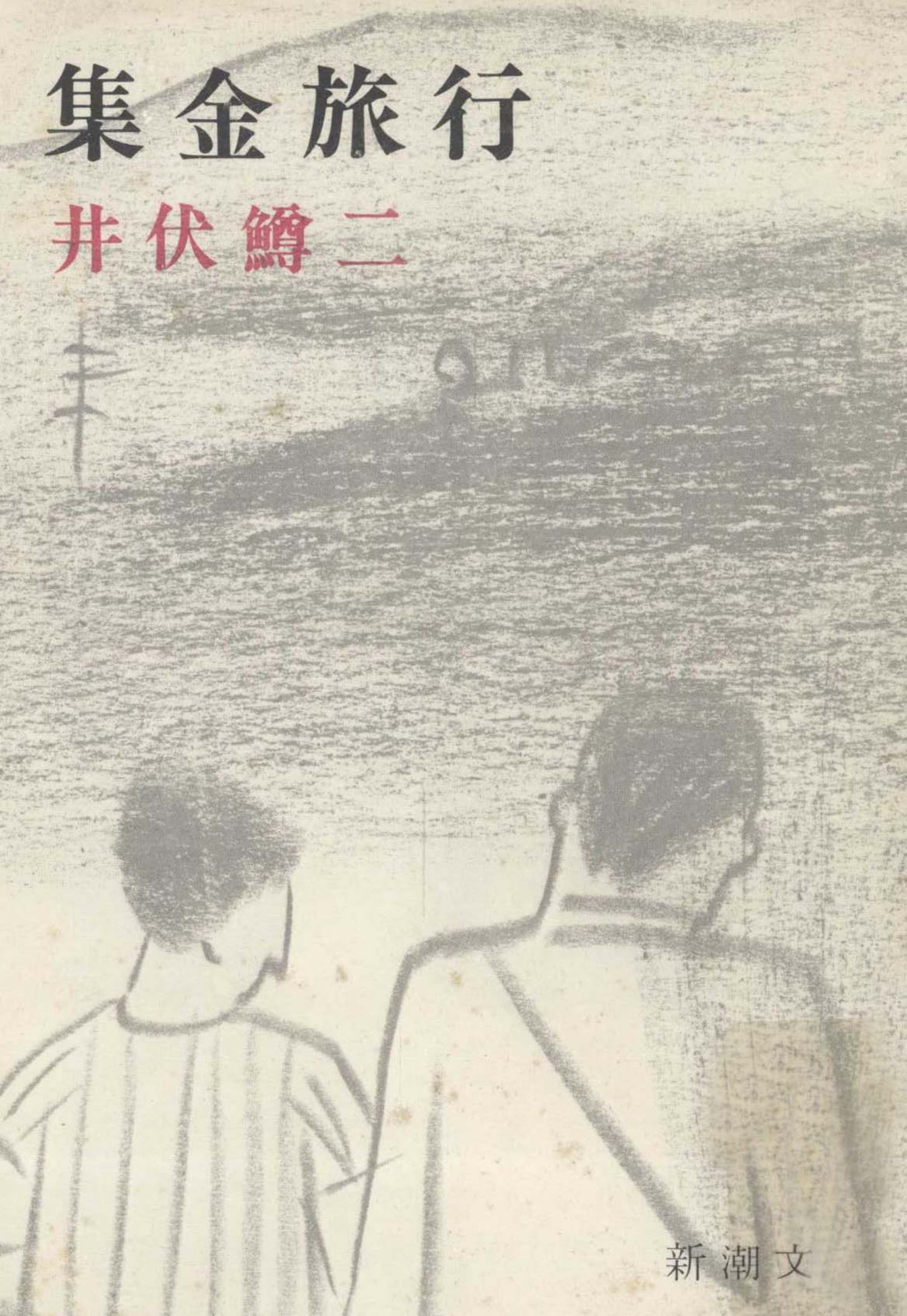
集金旅行

井伏鱒二



新潮文

集金旅行

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草34 D

昭和三十二年十月三十日 発行
昭和四十五年三月二十日 十九刷改版
昭和四十九年一月三十日 二十六刷

著者 井伏鱒二
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊥ 印刷・凸版印刷株式会社 製本・株式会社大進堂
© Masuji Ibuse 1957 Printed in Japan

新潮文庫

集金旅行

井伏鱒二著

新潮社版

1103

目次

集金旅行……七
追剝の話……七五
因ノ島……九五
白毛……一一五
丑寅爺さん……一三三
開墾村の与作……一六一
釣場……一八一

解説　山本健吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

集

金

旅

行

集金旅行

はじめ私は将棋の手ほどきをしてもらった関係から、荻窪の望岳荘というアパートの主人と昵懇にしていたところ、主人の女房がこのアパートで「三番さん」と通称されていた三号室の止宿人といっしょに逐電した。爾来、望岳荘の主人は将棋にばかり夢中になって、対局中に情勢がよくなって王手飛車をしたときなど、きっと美人の後妻を見つけると問わず語りに言うのが彼の口癖になった。しかしいよいよ後妻を見つけようという段になると、彼は急性肺炎でぽっくりなくなった。あとには勇太という小学校一年の男の子がたった一人とりのこされ、おとむらいに行ってみても、勇太は受附の三畳間で炊事女を相手にコリントゲームなどに夢中になっていて、全く他愛なかったのである。受附の次の部屋には町内の荻窪ロッジのおかみさんや香蘭堂文房具店の主人など、窓のところにしょんぼり坐って番茶をのんでいた。

おとむらいがすんだ翌日、勇太は腕に喪章のついた小学生の服を着て、望岳荘の「五番さん」という新聞記者と「七番さん」というたいへん美人ではあるが中年の独身婦人に連れられて、私のうちにやって来た。勇太は叱られるのではないかと思っていたものと見え、五番さんの傍らに寄り添う恰好で行儀よく坐り、いざといえばいつでも泣きだしかねない顔色であった。そこで五番さんが四角張っていうところによると、実はこのたび望岳荘主人の不幸については後始末で弱りぬいているというのであった。最早、望岳荘の建物も抵当に入れてあるし地代は一箇年分も滞っていて、勇太を引取ってくれそうな身寄の人は一人もない。故人の原籍地に死亡通知を打電し

たにもかかわらず、いまだに誰も駈けつけて来る様子もない。村役場から「ゴセイキヨヲイタム」という弔電が届いたにすぎない有様である。ついては、この勇太の身の振りかたについて、この際おたがいに故人との馴染み甲斐から妙案をうかがいに参上したと五番さんは私に相談をもちかけた。けれど私にも妙案があるわけではなく漫然と歎息して勇太を見ていると、この子供の睫毛にもいっぱい涙がたまって来た。そういう工合に泣きだしそうにしている子供の顔は、真剣味があふれて多く可憐なのである。

五番さんはハンケチで勇太の涙を拭いてやって、かねて用意していたものかポケットから紙煙硝をとり出して勇太にくれてやった。五番さんも私も同じような考えで、勇太の身寄があるなしにかかわらず、引取人が出て来るまで勇太に不自由させたくないという意見であった。しかし、引取人が出てくるまでは故人の所持品を始末するわけにも行かないだろう。五番さんの提案によって、私たちは望岳荘の部屋代を踏みたおして逃げた人たちから勘定を催促しようという計画をたてた。もちろん、勘定を踏みたおして逃げて行った人たちの荷物や夜具類は、望岳荘アパートの洗面所の横手の物置部屋にすっかり保存されている。夜具蒲団・机・テーブル・椅子・電気スタンド・掛軸・額ぶち・行李・トランク・火鉢・ギタ・オルガン・麻雀道具、その他こまごましたものがいろいろしまってある。六年前に故人が望岳荘を開業して、その間に部屋代未納のまま逃げ出した人が想像以上の数であることも納得できるだろう。未納者の原籍地を帳簿で調べそれぞれ督促状を出してみて、それでも送ってよこさなければ、私たちは遺留品を処分しようということにした。五番さんは故人の臨終に立ち会ったそうであるが、なにしろ望岳荘主人は逐電した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

細君の悪口ばかり言いながら息を引きとったので、後始末のことを言う暇がなかったとのことである。このことについて五番さんは、いっしょに連れて来た七番さんに愚痴をこぼした。

「臨終のとき、あなたがそばで氷嚢をとりかえたりなんかしていたから、故人は後始末のことをいう余地がなかったんですね。年増おんながそばにいると、故人はきっと逃げた細君の悪口をいう癖があった」

「お生憎さま。あたし、これでもまだ若いつもりですわよ」

七番さんが半ば冗談に立腹してみせると、五番さんも堅苦しい気持から解放された様子であった。

「失礼。年増おんなでなくて美人といいなおしましょう。とにかく故人は、美人を見ると必ず衝動的に細君の悪口をいいましたね。それから、お湯からあがって一ぷくするときと、王手飛車をしたときでしたね」

しかし勇太が、僕もう帰りたいと言い出したので、五番さんも七番さんも近日中に結果を報告するから何分よろしく頼むといいのこして帰って行った。彼等が玄関さきに出て行ったとき、勇太は靴脱石の上に紙煙硝の一きれを置き、五番さんが止せ止せといってとめるのに石ころを拾って来て、一発どがんと音をさせた。ところが直ぐにその子供は涙ぐみ、ふしょうぶしょう私にお辞儀をして玄関を出て行った。おそらく、どがんと鳴った物音を私が大きな音だと讃めてやらなかったのが、この子供には不満であったのだろう。

初七日に望岳荘に行ってみると、五番さんが受附の次の部屋で町内の香蘭堂の主人と押問答し

ているところであった。香蘭堂は以前からこのアパートの敷地を持っている地主でもあり、建物を抵当にとって故人に金子を用立てている。彼は強硬に談じているのであった。

「そういうあなた御自身が、名実ともに借用証書の連帯責任者じゃありませんか。御不幸があってからこのかた見受けますところ、こちらさんには親戚が一つもないじゃございませんか」

「つまり利息さえ払えばいいのだろう」

たぶん五番さんは私が味方に加わったので気を強くしたものと思われる。

「おたがい町内に住んでいるのに、そんな因業なことを言わないでもいいだろう」

そういう剣幕で、五番さんは香蘭堂の主人を追いかえそうと意気込んでいたが、香蘭堂も相当したたかものであった。

「因業とは、これは意外ですね。ただ私は責任の行方ということについて、御相談しているだけでございます」

「いずれ払うことは払う。払うといったら払う」

「もちろん、払っていただきさえすればよろしいわけですがね」

私は目くばせで五番さんを部屋のそとに連れ出して、五号室に行って後始末の経過をたずねてみた。部屋代未納のまま逃げて行った人は六年間に十七人の数にのぼっているということである。そのため未収金三千九百四十四円、このほか別に立替金七十円すっぽかされたのが一口あるという。この一口は、逃げた細君の男に用立てた金子である。望岳荘の経営方針がスマートなる家庭的待遇というのであったため、こういう結果になったのかもしれない。五番さんが各未納者の原

籍地にあて、このアパートの窮状を訴えて支払をうながしたにもかかわらず、十七人のうちお詫びの返事と弔状をかねて返事をよこしたのは一箇月分滞納の三名だけで、清く為替で支払ってくれたのは二箇月分滞納者一名と一箇月分滞納者一名にすぎなかった。アパート住いの学生たちは休暇で地方に帰っている際でもあり、支払いするには好都合のときだろうと思われるのに成績が芳しくなさすぎるのである。五番さんは初めから憤慨しつづけて、これは田舎が不景気だとか景気がいいとかの問題でなしに、このアパートの窮状を見すてるか見すてないかの人道上の問題であるといきまいた。そして私に、その厚意があるなら地方に出かけて行って、滞納者たちから容赦なく未収金をとりたててくれないかと五番さんは私に懇願した。出かけて行って相手が留守でも留守でなくても家族の人に用件を述べ、支払ってくれなければ香蘭堂主人そっくりの口をきけばいいだろうというのである。故人に対する心づくしとして自分の腹を痛めないで用を足すというこの方法は、いささか責任のがれの感じであるが、私は集金に出かけてもさしつかえないと思った。

「どうです、行ってくださいますか」

そういって五番さんは外国人のように私の手をつかみ、手を強くにぎりしめた。そんなに劇的に興奮してくれても、私がうまく集金できなければ五番さんもがっかりするだろう。私は旅行に出たいと思っていた矢さきなので、旅費自弁で出かけると言った。

「行ってくれますか。有難い。それでは四箇月以上滞納の大ものだけで結構です」

彼は手帳をとり出して、滞納者たちの名前とその職業や原籍地のノートを見せてくれた。四箇月以上の滞納者は幸い地方の都会から遠くない土地の出身者が多かったようで、集金に出かける

には都合がよさそうであった。大ものの滞納者は、主として関西方面の人に多く見受けられ、岐阜の市内に一人、神戸市の郊外に一人、岡山の郡部地方に二人、福山市の北部地方に一人、尾道市に一人、山口県の岩国町に一人、福岡市の郊外に一人、それから、北海道の札幌に一人という率で分布していた。およその見積りから、私は先ず東京に一ばん近い岐阜を振出しに集金して行く旅程がいいだろうと考えた。しかし五番さんのいうところによると、自信をもって福岡まで直行して、そこで一仕事してから後がえりするのがいいだろうというのである。なぜかというに五番さんの表現によると、旅費の心配という点から云っても「背水の陣」をしかなくては度胸が出ないだろうというのであった。私たちは日本地図を見て銓衡した挙句、その中庸をとって岩国町を振出しに活躍することにした。そして私がノートの滞納者の名簿を抜書きしていると、ドアをノックして七番さんが酸漿を鳴らしながらやって来た。

「香蘭堂は帰っちゃいましたわ。帽子を目ぶかにかぶって、玄関の戸をぱたんと閉めて出て行きました」

気をきかして報告してくれたのである。彼女は湯あがりの女性の特有とするセンチメントのある匂をさせ、その匂と酸漿を嚙みならす音の調和を彼女自身たのしんでいるかと思われた。たとえば山梔の木のそばを通るとき、私はこういう匂を嗅いだことがある。彼女は卓上に肘をついて私の抜書きしている名簿をのぞきこみ、

「おやおや、また名簿ですのね。よく丹精がつづきますこと」

そういう無精らしいことを言ったのである。そして五番さんが、岩国町の名物で食べものの名

物は何だろうと私にたずねると、いきなり彼女が横合から磊落に笑い出して、

「岩国の名物は、鮎・織物・紙・酒の瓶詰」

淀みなく言うのである。学校の地理で覚えているのかと思っていると、岩国には彼女の古い恋人がいたということで、鮎・反物・紙・酒の瓶詰など、以前お土産にもらったことがあるという。またこの町には彼女の悪い恋人もいるというのである。こんな艶聞をきかされる場合、私たちは勝手にしろと半畳を入れるのが常識である。そうして、その恋人に何かことづけがあれば伝えてやろうなどと冗談口をたたくのである。ところがその常識通りの冗談を私が言っていると、彼女は口のなかの酸漿を窓のそとに吐き出して、発作的に表情が気色ばんで来た。そして私がこのアパートの用件で岩国に行くのなら、彼女もいっしょに出かけて行って悪い恋人から慰藉料を巻きあげて来ると珍しいことを言いだした。彼女の言いぶんによると、当然それは要求してもいい慰藉料であるが、彼女の思うように万事うまく行けばこのアパートを抵当から受け出して、勇太を援助してやってもいいという。どうせ一度は出かけて行って、せめて彼女の貧乏しているところだけでも見せてやりたいと思っていたのだそうである。私はそれを反駁したりさまたげたりする必要はなかったが、私の旅行の目的とそれとは種類がちがっている。五番さんも彼女の納得をうながしたが、五番さんは必要以上に堅苦しくなっていたようである。

「しかし、それはお止しになったらどうです。あなたが是非とも行くと仰有るなら僕は妨害しませんが、それとこれとは問題の性質がちがいます。こちらは岩国の町だけではない、福岡にも、尾道という町にも、岡山にも神戸にも、岐阜にも寄ることになっています。時機を改めてお出か

けになったらどうでしょう」

彼女は寧ろとりすました顔をして、彼女も自然の成行きで堅苦しそうに主張した。

「そうですかしら。でも、そう仰有られるとあたくしも言いたくなりますわ。あたしも、岩国だけでなく福岡にも尾道にも、大阪にも岡山にも岐阜にも古い恋人がいます。この際、ひとまとめにみんなから慰藉料をもらって来ることにいたしますわ」

嘘かまことかそんな処々方々に顔なじみを持っているという身の上に驚かされ、私は圧倒される思いで黙っていた。五番さんも、おそらく私と同じ気持から黙り込んでしまった。

「僕は、是非ともお止しなさいというのじゃありません」

と言っただけである。彼女も言いすぎたとすこしは気がついたらしく、柱暦のところに立って行き、一枚一枚その暦をめくりながら独りごとを言った。

「四月九日、先負。十日は仏滅、十一日は大安。あたくし、十一日の出発にしようかしら」

そんな独りごとを言っていた。

十一日の午後三時、七番さんと私は特急で東京を発ち、明くる日の夜明けに広島で乗りかえ午前八時ごろ岩国の町に着くことができた。しかし東京駅で汽車が出るのを待っているとき、七番さんは彼女の名前を七番さんと呼んでもらっては旅さきで人ぎきが悪いから、コマツさんと言って呼んでくれと註文した。駅まで見送りに来てくれた五番さんは、今度からは彼もコマツさんということにしてもいいかしらと言いながら、手をさしのべて彼女に握手をもとめた。そして彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com